

がん克服歩いて支援

病を話せる雰囲気必要

3年前に妻をがんて亡くした経験から国内のRFLに参加し、普及に取り組んできた。沼津市で会社を経営する。



RFL実行委員長

松田 一男さん (裾野市)

師や看護師をはじめ多くの人に支えられるうち、私たちが心は感謝でいっぱいになっていった。退院後の残された時間、私たちは病気を公表し、友人たちに今までの感謝の気持ちを伝えていくことに決め、妻も死の影を表面にみせず常に笑顔で過ごした。彼女なりに自分の生き方を貫こうと決意があったのだと思う。彼女の姿を見て、本当の勇気や幸せを教わった気がした。告げ知らせの世界は決して絶望で

はなく、大切な何かを得る事ができる。そんな妻の思いを伝えていくことで、私自身も奮い立たされる。知人にRFLの誘いを受けたら、自分思いと通じるものを感じた。がんを周囲に打ち明けるのに抵抗はありましたか。「世間にはまだがんを打ち明けにくい空気がある。まずは一回目を成功させて、県内で定着を目指したい」とは伺えますか。

10年前に子宮頸(けい)がんを患い、都内の患者会で救われた経験から県内初の女性特有のがん患者会「オレンジティ」を結成した。RFL静岡大会では副実行委員長、県職員。



患者会「オレンジティ」理事長

河村 裕美さん (熱海市)

「若い女性にとって、体の変化や恋愛、性などの悩みを身近な人に話すのは抵抗がある。誰にも相談できないような感覚に陥る。会を訪れる人の多くは、経験者の話を聞いただけでも「自分には1人ではない」と安心感を得るようだ。現実的な問題を解決したいという思い、県内に女性特有のがん患者会が必要とするものは、早い時期に知識を得られれば気持ちも楽だと思える。」

「RFLを通じて訴えたいことは、」



横浜会場に参加した静岡実行委員会のメンバー。患者を中心としたチームがフラッグを掲げて歩き、がん根絶の願いを訴える。昨年9月、横浜市

に何の意味があるのか。昨年、半信半疑のまま兵庫県の会場に参加した小山町の40代の女性患者は現在、県内各地で開かれるRFL説明会で体験談の語り手を務めている。4年前に発病し、抗がん剤の副作用との闘いで気が細くなる日々を経験した。不安の相談相手を探した。インターネットの患者コミュニティに求めたが、「孤立感を感じただけで、自分は健康な人とは違う」という意識は消えなかった。それが、患者と友人、地域の人が一緒にイベントを楽しみ、それぞれが支え合える範囲の手助けをしながら歩く様子を見て、「がんが特別な病気だという感覚が消えた。力を合わせれば何でもできると思えるようになった」という。人々のつながりが最高の治療薬。そんな確信を得た。イベントはチームフラッグを掲げてパレードする「サバイバーズ・ウォーク」やトークショー、Vメッセージを記したキャンダルを並べる「ルミニエ」▽各団体の啓発ブースや個人相談などを繰り広げる。誰でも自由に参加できる。募金グッズ販売、ルミニエ参加費などの収益は日本対がん協会に寄付し、無料相談や医師受診制度などに活用される。問い合わせは実行委員会事務局(電話090-5104-6322)へ。

RFL県内で初開催

がん患者や家族を支援する米国の慈善イベント「リレー・フォー・ライフ静岡2009 with 富士山」(同実行委員会など主催)が9月12、13日に御殿場市陸上競技場で開かれる。米国内では年間5千カ所、国内でも3年前から過去10カ所が開かれ

9月 御殿場

を見せつつあるが、県内では初めての開催。患者の孤立を防ぐ地域の協力態勢を築き、予防検診の意識を高めてがんの克服を目指すため、県内有志でつくる実行委員会が準備に奮闘している。(御殿場支局・宮坂武司)

リレー・フォー・ライバーや遺族を中心とするチームが24時間、たすきをがん根絶の願いを社会に

演奏会やトーク、個人相談も

「つながりが最高の薬」

アピールするイベント。生涯にわたって闘病が続くことの多いがん患者を支えるため、「いつでも仲間がいる」との思いを、これまで24人のノベル賞受賞者を輩出するなど1985年、米国の1人の医師ががんへの理解を促すため、24時間走り続けて寄付を募ったのが始まり。米国では現在、全米対がん協会が普及に努めて年間約5千カ所、ほぼ学校区単位の地域行

を抱いたという女性は、患者会への協力やブログでの体験発表など、がんで悩む人の力になろうと活動している。がん経験者は国内に30万人といわれ、男性の2人に1人、女性の3人に1人が発病すると推計されている。しかし、患者が堂々と病気を公表し社会に必要な支援を求めて発言する欧米と比べ、日本ではまだ孤立している患者が多い。検診受診率の低さ、予防対策の普及の鈍さなどがん根絶に向けた意識も欧米に大きく後れを取っている。

広がる活動 形態さまざま

欲ある患者を相談員に養成している茨城県のように、患者同士が無理なく支え合える仕組み作りが必要だと訴えている。8年前に発病した女性のがん患者会「オレンジティ」は、県内・都内4カ所で毎月開く相談会をはじめ、勉強会、政策提言など幅広く活動を展開している。相談者は増加傾向で現在の利用者は150人ほど。女性特有のがんは検診による予防や早期治療が可能だとして、来年度までの検診率50%を目指している。RFLではチームウォークや啓発ブースに参加を予定する。昨年患者会として活動を開始した「一歩一歩の会」は、沼津市で月例会を開くほか、富士登山など患者以外の地域住民も一緒に楽しむイベントを重ねている。RFLではアメリカンフラワーの造



アメリカンフラワーの造花を作る。一歩一歩の会メンバー。沼津市

花のチャリティー販売を計画。製作体験会では患者と家族、地元小中学生らが合同で作業し、準備段階から交流の輪を広げている。RFLにはこのほか県東部の全市町でチームの結成ができるよう実行委員会が準備中。今後の地域の患者支援活動を担う核とするため協力を呼び掛けている。

県内の支援組織

県内のがん患者の自助組織、支援団体は徐々に増えつつある。患者、医療従事者ら有志が結成した団体、各病院単位でつくる団体、インターネットで知り合ったグループなど形態はさまざま、それぞれ支援の輪を広げようと活動している。乳がん患者を支援する「あけぼの静岡」は、全国組織の支部団体として17年前に結成された県内患者会の草分け的存在。静岡市で毎月相談室を開くほか、県立総合病院での相談ボランティア、専門家による医療講座などを続けている。当初は固定会員による会合が主だったが、5年ほど前から新規相談者が急増し、「患者が自ら情報を得ようとするようになった」(星野希代絵代表)と社会の変化を反映して活発化している。一方、相談の充実を図るため会員の間には行政、病院、患者の連携強化を求める声が多い。行政が意